

「科学技術イノベーション政策のための科学 研究開発プログラム」 研究開発プロジェクト事後評価報告書

平成 27 年 6 月

研究開発プロジェクト名： 未来産業創造にむかうイノベーション戦略の研究
研究代表者： 山口 栄一（京都大学大学院 総合生存学館 思修館 教授）
実施期間： 平成 23 年 1 1 月～平成 26 年 1 0 月

1. 研究開発プロジェクトの目標の達成状況

目標はある程度達成されたと評価する。

本プロジェクトは、①サイエンスとイノベーションをつなぐ目利きである「イノベーション・ソムリエ」の教育体系と認定制度を研究し人材の育成に貢献する、②米国の SBIR (Small Business Innovation Research)などを参考にイノベーション・ソムリエを活用した形の適切なファンディング制度等の政策を提言する、③日本社会において生じたイノベーションを対象として、科学、技術、人間、組織などの有機的な連結を可視化し、イノベーション・ソムリエの目利き、政策の立案・評価、および大学や民間企業間のネットワーク形成に資するツール群（日本知図等）を開発・公開することを目標とした。研究開発の実施により、「SBIR の制度分析」、「SBIR 代表者の分析」、「学術分野知図」、「日本知図」といった、それぞれの研究開発要素が進展し、新たな知見をもたらしている。加えて、それらの成果が情報システムや書籍の形で広く公開されていることは、今後の制度設計に向けた議論の材料となるものと期待される。一方で、「イノベーション・ソムリエ」の教育体系と認定制度については、大きなガイドラインが示されたものの、「教育体系、認定制度」とするには距離がある。また、最終的に示された政策提言については、現実の政策に生かすには、現時点では十分な根拠があるとは言い難い。なお、研究開発の過程で SBIR 制度に焦点をあてたことは、当初の目標設定における見極めが不十分であったことは否めないが、結果的に研究開発の進展につながっている。

2. 政策のための科学プログラムの目的達成への貢献状況

○成果は、現実の政策形成に効果・効用をもたらすことができる程度期待できると評価する。

本プロジェクトの結果は示唆的で、今後の制度設計にむけた政策立案者等との議論につながることを期待される。一方で、政策提言の内容については十分な根拠が示されているとは言い難く、慎重な説明が必要である。また、「日本知図」については、政策立案者や使用者の観点からの有効性の検証が行われていないことから、現実の政策形成への効果は現時点では不明であり、今後の検証が望まれる。

○本プロジェクトは、学術的知見あるいは方法論等の創出にある程度貢献できた（貢献が期待できる）と評価する。

科学技術の現象を捉える方法論（データ処理、表示方法）が提示されており、学術的意義についての検証が十分になされているとは判断しがたいものの、今後、それらの意義が認め

られるものと期待できる。また、米国の SBIR 制度の詳細な調査結果は有用な知見である。しかしながら、比較制度分析および科学技術史等の観点から見ると、SBIR 制度についての政策提言が十分に説得力のあるものとは言い難い。

3. プロジェクト目標達成に向けた取り組みの状況

○研究開発活動および実施体制・管理運営は概ね適切に行われたと評価する。

研究代表者が、プロジェクト全体を統括して、SBIR 制度に関する諸問題に焦点を絞るために研究開発体制を変更するなど、効果的な活動を行うための工夫が行われたと考える。一方で、教育体系・認定制度の検討については、当初の目標に達していないことから、十分に適切な活動および運営がなされたとは言い難い。

4. 総合評価

一定の成果が得られた（一定の期待がもてる）ものと評価する。

上述のとおり、各分析や開発項目が進展し、新たな知見や方法論を提示していることは、重要な成果であり、今後の展開が期待される。なお、現時点では、各成果の現実の政策形成プロセスへの効果・効用は不明である。

5. 特記事項

本プロジェクトの分析結果および示唆を今後の政策の議論につなげていくことが期待される。ただし、政策提言の公表に際しては、分析・比較の対象や各制度の背景なども含めて、丁寧に説明されることが望ましい。